

冬の薔薇

——追悼 奥田 聡——

大 田 一 廣

関西在住の研究者のあいだにかつて、経済学や哲学・思想の古典を読む勉強会がいくつかあった。1985年によく関西に職を得たわたしもしばらくののち、ほぼ毎月大阪経済大学で行われていた竹本洋（当時、大阪経済大学勤務）をリーダーとする「古典読書会」に参加させていただいた。そのときのテキストはたぶん、英仏経済学の交流史の結節をなすと目される R. カンティロン『商業試論』（*Essai sur la nature du commerce en général*, 1755）ではなかったかと思う。

いかにも頑強で勁い意志を窺わせる風貌がとても印象的なひとりのやや小柄な学究に出逢ったのは、その「古典読書会」の折のことだったと記憶している。R. カンティロンや J. スチュアートのテキストを18世紀ヨーロッパの文脈に定位して一語一行づつ丁寧に読んでゆくというスタイルのこの「古典読書会」で、急ぎがちな口吻を遣こしつつ主張や疑問の明快な発言をしていた、どこかしら人懐っこい雰囲気をもつその学究が、奥田聡だった。勉強会のあとの飲み屋でも白熱の議論は当然ながら続いたし、酒好きの“ならず者”はおのずからたがいに近づきになるという〈世間の法〉にしたがって心措きなく愉しむのを常としていた。K. マルクスを曳きづって貨幣論の“泥沼”に入り込んでいたわたしは、奥田聡の関心が J. スチュアートを中軸におく「金融の理論的・歴史的研究」にあったことから、そういう両面にわたる〈同好の士〉たるかれにいつその親しみを覚えていたのかもしれない（このときの「古典読書会」の成果が小林昇監訳、J. スチュアート『経済の原理』名古屋大学出版会、「第1・第2編」1998年、「第3・第4・第5編」1993年の日本語訳であり、奥田聡も J. スチュアートの研究者としてこの記念碑的な作品の共同翻訳者に名を連ねている）。

奥田聡とたがいに知り合ってから、〈旧世界の解体〉による焦燥と〈近代の不安〉の意識を抱えた J. スチュアートの利子・貨幣論はもとより、「歴史の学」をめぐる学問の方法や思想の構えにいたるまでしばしば沸騰する議論を繰り返し、昂まる論戦のトーンに比例して酒の量も増えに増えたのだが、こういう始末は勉強会の毎度・毎夜のことだった。とにかくかれとはよく吞んだ——この印象はいまも変わらない。

饗宴といえば、1992年2月29日亀岡の湯の花温泉・旅館「すみや亀峰菴」の一夜はとりわけ忘れがたい。わたしのフランス留学の歓送のために開いてくれた研究合宿というのが名目だったが、京都学園大学での勉強会を終えたあと、渡辺恵一の世話で湯の花温泉に繰り出したというわけである。当日当夜の参加者は、奥田聡のほかに竹本洋・渡辺邦博・渡

辺恵一・松井名津だった（ついでにいっておけば、浅羽良昌から“草鞋錢”が届いている）。ところが、京都に近い亀岡のゆったりと落ち着いた「すみや亀峰菴」でやわらかな湯と京風の穏やかな料理を愉しみながら寛いでいるさなか、酒にまかせて奥田聡と「大論争」になったのだ。どういう話向きだったかいまではすっかり忘れてしまったけれど、いつものように学問論や政治論、思想史研究の方法や姿勢といったいくらかく青臭い話題〉だっただろう。奥田聡には、わたしの如き“ならず者”の口説が狂気の沙汰の与太話と思われたのかもしれない。

たがいに知り合った当時のわたしの年齢にかれ自身が差しかかったころの思いを、あるときわたしにそっと告げた「風格」というのはどういうことだったのか。いまとなってはかれのその言葉の真意は定めがたいが、そういう繊細な対話をもちえたことが深い「思ひで」（小林秀雄）に繋がる〈経験〉の痕跡というものかもしれない。

だが、言うべきことも言わぬまま、奥田聡は忽然と逝ってしまった。かれの口惜しさたるや、いかばかりであったろう。無念というほかない。

奥田聡は東京都立白鷗高等学校（旧制府立第一高等女学校）のわたしの後輩である。偶然とはいえ、このことがなおいわたしを捉えて離さない。湯の花温泉「すみや亀峰菴」で撮った写真のおくで微笑む奥田聡と重ね合わせるようにわたしはいま、アルモンド・タワーと呼ばれていたアーチ型の母校の門をたがいに時を隔ててくぐった〈青春の高校時代〉をじつに懐かしく想い出している——さて、奥田聡はどの校舎のどの教室で学んでいたのだろう。

手許にある母校の同窓会「鷗友会」が発行する機関誌『白鷗』第150号（平成21年6月1日発行）の最終頁には、つぎのような消息が掲載されている——

「逝去された方々 左記の方々のご冥福を謹んでお祈り申し上げます。」という囲み欄に、「白31 2 奥田 聡 21・3・18」とある——東京都立白鷗高等学校第31回第2組奥田聡 平成21年3月18日逝去。旧制から数えると通算94回生となるはずである。

その名を折り句にしつらえた「冬の薔薇」一首を奥田聡に謹んで捧げたい。冬の薔薇を、しかも匂ひ頭つ群青の薔薇をかれは好んでいたかどうか——

・奥志賀のゆふぐれに頭^たつ冬の薔薇さすらはばいま遠み偲ばゆ

（2010年2月1日識）